

だがしや楽校入門編～気軽な“みせ開き”でまちに出よう～
第13回 12月3日（土曜日）午前10時～正午 於：セッション杉並
講座タイトル ふりかえり～牧野先生をお迎えして～
ゲスト講師 東京大学大学院教授 牧野 篤
学習支援者 谷原博子

学習支援者 谷原

おはようございます。今日は牧野先生がお越しくださいました。みなさんの発表の後にお話を頂きます。それでは、振り返りをしてみましょう。

ポイントは、夏、8月27日の杉並第十小学校でのだがしや楽校。山形の農業高校の生徒さんたちが来たり、インドからSkypeで参加する方がいたりと多彩でしたね。杉並地域の活動を地方に広げるといことで、山形に行かれて農業体験をした方もいましたね。福島県に行って、だがしや楽校を通しての交流もしました。自分の人生の見せ方という部分で日直制を取り入れました。人生の棚卸し、見直しで、なにかを見つけられたと思います。また、他の方の人生から学んだことも多かったと思います。

今回は、受講生から、講座での活動を発表していきます。次に、社会教育センターからまとめていただき、牧野先生に講演を頂く形で終わります。

参加者1

杉十小のだがしや楽校では準備の段階からポスターを作り、いろいろやりました。当日は、他の方のお手伝いをしていて、子供たちとの工作を行ったのですが、なかなか評判が良かったです。お客さんも来てくださいました。山形県立置賜農業高校の豆ガールズ(女子高生)も参加して下さって、盛り上がりました。ブースは、かなり忙しくて、他のみせをちゃんとみる事ができませんでしたが、一日とても楽しかったです。割り箸のベンチや松ぼっくりのマスコットはすごく精巧で、10分弱で作れるものでしたが、みなさん夢中になっていました。

参加者2

Skypeでインドのアンダマン島から中継したのですが、去年はネパールから通信しようと考えましたができませんでした。今年は現地時間の土曜日で、ちょうど、大人塾・だがしや楽校開催の時間に合ったのでチャレンジしました。通信回線が悪くてホテルの回線を使わせてもらってやってみました。インドならば通信インフラは良いと思ったのですが、本土から離れていたのか、かなりドキドキしながらの通信でした。日本とインドとの歴史関係などを写真と共にお話をしたかったのですが、通信の悪さのために断念しました。行き当たりばったりで、インド全体を紹介する形にしたのです。最後に、杉並から“上を向いて歩こう”を合唱しました。

参加者3

海外とつながり、中継できるなんて、すごいことだと思います。画面が大きかったので、本格的でした。

参加者2

杉並から歌を歌ってくれた時は、現地の方も聞いてくれました。ホテルなので、いろんな人が来ていたので慌ただしかったのですが、こういう形で通信というのは福島や山形とも出来ると思います。幸い、インドのホテルは上流のホテルではなかったから出来ました。通信を通して、お互いに歌の交歓をしたり、写真紹介など活動の可能性は広がると思います。

参加者4

9月17日から3日間、山形県東置賜郡川西町に行きました。温かい歓迎をうけ、稲刈り、ブドウ狩りをしました。マレーシアから来ている学生たちと交流したり、地元の方ともたくさん交流を深めました。地方は過疎化していて、限界集落が増えていると聞きます。かつては住人が3万人、今は1万5千人しか住人がいない。それでいて、町会、議員の数は変わらないのだそうです。地元の旅館に泊まらせていただき、温泉と食を楽しみました。

参加者5

11月に福島県棚倉町の「だがしや楽校棚倉大会」に参加しました。家族以外で旅行するのは初めてで、しかもご招待をさせていただいたのは本当にありがたかったです。現地での歓迎も素晴らしかったです。皆様がずっと震災の影響を受けていらっしやったと聞くと申し訳なくも思いました。柿が生っていたのに採られていないのは、放射能の影響を考えてとのことでした。地元の方ともたくさん交流し、日々の暮らしを聞かせてもらいました。子供もたくさん来てくれて、男性のお客様も多かったのが印象的でした。杉並の方でも、だがしや楽校の参加者は多様と思いましたが、地元の方のパワーはすごくて、圧倒されるようでした。

参加者6

だがしや楽校棚倉大会では、子供たちが興味津々でやってきて、「超能力振り子」作りに参加してくれました。とてもうまくいきました。町長さんもいらっしやっただので、こういうのが理科につながるのですよとお伝えしました。だがしや楽校棚倉大会は初めての開催で、地元の文化祭

の行事と一緒に行われました。子供一人で来場できる会場ではなかったので、たくさんの賑わいはなかったのですが、それでもひとつひとつの交流が素晴らしかったです。なにより、杉並から広がった事が誇らしかった。教室だけで終わらず、地方にいき、交流をして、だがしや楽校が社会教育の一翼であることを実感しました。泊まりがけでいったので、杉並から一緒にいった仲間とも交流が深まりました。

学習支援者 谷原

人前で自分の人生を話すのは如何でしたでしょうか。みなさん、夢中で聞いていらっやいましたね。

参加者2

時間を延長して話してしまいましたが、気恥ずかしいところもありました。開き直るといのもあるでしょうね。

参加者1

自分自身の「好き」を再確認しました。広げたいという気持ちも深まりました。いい体験でした。

社会教育センター中曽根

とても楽しく聞かせて頂きました。お人柄を知れるのは貴重な機会でした。生きていくにはいろんな方との繋がりが基にあるんだなと感じました。だがしや楽校の生徒さんとの繋がりが、著名人の方とも繋がったり。地域のお店が、また別の方と繋がったりと、だがしや楽校らしさを感じました。

社会教育センター 遠藤

こういう大人になりたいなと感じました。外向的な人間ではないのですが、自分のことを話すのも、聞くのも興味深かったです。みなさん、話すだけではなくて、面白く伝えられているのはすごいです。本当に発見が多い日々でした。

参加者2

日直も、自分みせなのかなと思いました。

社会教育センター 瀬山

自分自身を語るときに、どういう風にするのかなどは勉強になりました。こういう手法があるんだな、楽しさを伝えているなど手法を勉強させて頂きました。この仕事につけたのはありがたいなと思いました。両親がこのだがしや楽校の講座を見に来たことがありまして、みなさんの活動や私の仕事を見せることになったのですが、「あなたに合っているね」と言われたのはうれしかったです。

学習支援者 谷原

誘うということで、どんどん広がりが出ていたのは素晴らしいです。これから、場所をどんどん変えて、集まって、体験の機会を広げるのは良いと思います。人を誘う、つなげるというものもあると思います。



学習支援者 谷原

11月19日に開催した第2回のだがしや楽校では、フリーマーケットを開いて、その売り上げで場所代をまかなおう、という事になったのは皆さんの発想の良さだと思います。こういうことが隣近所のお店に広がって商店街まで広がっていくかもしれない、「気楽なみせ開き」の象徴的な出来事だったと思います。みなさんの学びの成果がでているなと実感しました。

※第2回だがしや楽校では、受講生の紹介でお食事処を会場としてお借りした。

多世代との交流が特徴的なだがしや楽校で、今年は中学生が参加してくれました。今日は学校があるので参加はできなかつたですが、彼女にインタビューをしてきたのを発表させてください。

- ① お母さんがだがしや楽校に参加しており、その後をついてきた経験があったそうです。どうして、ついてきたのでしょうか。

答え:「かわいい娘の私をおいて、お母さんはどこに行っているんだろう」と思って、参加していたそうです。

- ② 受講生として参加してみて、どう思ったのか聞いてみると、

答え:「みなさん、楽しそう。うまいったとき、顔が明るくなったのは、私たちと同じです。お母さんは若返っていました。大人のママゴトだと思っていたが、実際に見てみると、進化系のママゴトだと思いました」。

- ③ 今の趣味は「人間観察」だそうです。お母さんが地域活動をするということについて聞いてみると、

答え:「お母さんが違って見えた。PTAで学校行事に行くのとは違い、役目を意識しない状態でだがしや楽校に関わっているから楽しそうなのがすごくよく分かります。資格にもチャレンジをしているのが、すごい。一人っ子なので、親以外の大人に出会えたのは良かったと思います。部活や塾で忙しいので、中学生は社会教育に参加できる時間がないです。そのかわり、学校に大人がきてくれて、私たちの生活をみてくれたり、昔遊びなどを教えてほしい」。

- ④ 「中学校でオリンピック・パラリンピック教育があることをほかの受講生の人に教えてみると、みなさんが積極的に聞いてくれました。そういった経験から、将来は教師も良いかと思った。今は、外交官になるのが夢ですが。同じ中学生から見ると、いろんな大人と一緒にいるので、珍しいと思われれます。今の若い子は挨拶していないと言われていますが、大人が挨拶をしていないと思います。スマホばかりしているのは大人です。スマホをしているのは、挨拶しない宣言をしているようなもの。

国語の点数があがり、コミュニケーション能力があがったと思う。自分なら、こう考えるという経験知に自信をもてるようになった。

- ⑤ 50年後は、どんな大人になっていますかと聞いたら、「自分の趣味を自慢に思える大人」と答えてくれました。

社会教育センター 中曽根

杉並区には土曜授業があります。地域の人と生徒が会うプログラムが増えたらと思います。学校主体で行われているのが現状です。これから、地域との接点が増えたらと思います。

参加者5

こうして中学生と接してみると、自分の生活や家族を振り返るようになりました。ある日、孫はボランティアでフェスティバルに参加しました。帰ってくると、くたくたに疲れていましたが、「杉並って、すごいね」と目を輝かせて言ってきました。

私の影響があったのかもしれませんが、この孫がどういう風な人生をこれから迎えていくのか大いに期待していますし、なにより、変化にうれしくなりました。

中曽根

会場となったお店が、地域に親しまれ広がっていったのが素晴らしいです。だがしや楽校の生徒もやってくるでしょう。豊かなコミュニティになるなと思いました。

学習支援者 谷原

ありがとうございます。それでは、牧野先生からご感想を含めて、お話を頂きます。

ゲスト 牧野篤 東京大学大学院教授

1960年愛知県生まれ。1988年名古屋大学大学院教育学研究科博士課程修了。名古屋大学大学院教授を経て、2008年より東京大学大学院教育学研究科教授。専門は中国近代教育思想、社会教育、生涯学習。日本のまちづくりや高齢化・過疎化問題、多世代交流型コミュニティの構築などに取り組んでいる。著書には、『生きることとしての学び』（東京大学出版会）、『シニア世代の学びと社会』（勁草書房）、『農的な生活がおもしろい』（さくら舎）などがある。

演題：小さな「社会」をたくさんつくる

今回は、小さな「社会」をたくさんつくる。すべての人がフルメンバーとなる社会へというタイトルをつけました。私も、みなさんの自分みせに参加したかったです。今、地域ではいろんな動きがあります。生涯学習の会議で、海外に行くことが増えてきているのですが、グローバル化による移民や産業のあり方、失業、再開発などが世界的に問われています。東アジア圏では少子高齢化です。多くの国では政府が政策をつかって、上からのトップダウン型が多いのですが、日本は政府が生涯学習に関する政策をもっていないので、ボトムアップといえます。地域が実績をつかって、上にあがっていく形です。

生涯学習は、日本は進んでいないと海外とくにイギリスに思われていますが、実際はとても進んでいますよね。日本の事例を紹介すると、「なんで、住民が自分から社会を創ろうとしているんだ」と質問されます。今日は、日本の事例をすこしご紹介させていただきます。



1 「タマゴ」プロジェクト(※)のように、多世代交流型の町づくりができています。千葉県柏市になります。学校との連携が深まって、学校のイベントを請け負うようになってきました。遠足に高齢者がついていって面倒をみています。「多世代さん」と言われていて、学校が地域との連携をとれるようになってきました。子育てがしやすい町という評判がたつて、子育て世帯も増えてきました。

(※)タマゴ＝他+孫(よその子を孫にしよう) そうすると、多+孫(地域の子ども全体が自分の孫になる)になるという、地域づくりのプロジェクト

空き家をグループホームにする事業が出てきたり、自宅を若い世代に貸し出すといった動きも出てきています。医療機関も増えてきて訪問医療ができて、高齢者は不安もなく、楽しく地域に関われるようになってきています。

2 豊田市での活性化事業は、農林業がうまく行かなくなった地域の活性化です。環境に配慮したライフスタイルをベースにしながら、都市と農山村の交流事業をやりながら、新しい仕事を創っていく形にしました。

高齢化率5割のところ、若者10人が移住して始まりました。集落が大きくなって、地元の名産を売るイベントも800人ほど集まるくらいになり、農業を中心とした体験プログラムも成功しています。結婚する人も増えて、さらに子供も増えてきました。村としては25年ぶりの子供ということで記念になり、今ではベビーブームになっています。

地元に住むリーダーの若者は、56の仕事があるなかで、17の仕事が賃金になり、残りの仕事により豊かに生活を安定させているのだそうです。仕事を分け合って、生活を支え合っています。都市部で薪ストーブがはやっているの、雑木を割って薪を作り売ったところ、大きな収益になりました。この薪を作るのも、地元の人にやってもらい、収益と仕事を回しています。高齢者にとっては仕事にもなるわけです。

集落全体が顔見知りなので、地域全体をグループホームにし、みんなで面倒を見ていこうという動きが出ています。いずれ、子供が増えていくので、廃校になった学校もなんとかしないといけません。そこで、集落全体を学校化する教育システムにして、廃校を学びの場にしていく特区をつくろうとしています。

大学入試では子供時代の体験を評価し臨機応変に対応できる子供を育てることを目指す方向になっています。そういった教育の先鞭になる地域になるよう動いています。

発電システムも活発で、地域全体でエネルギー自立ができるようになってきました。こちらも、様々な実験が増えてきます。お金が第一でなく、同時に環境配慮型の生活もできるのです。

3 北海道富良野市では、市民と生徒との協働が進んでいます。キャリア教育として小中高を一貫して行う仕組みです。小中につなげて、商業高校につなげていきます。マイノートという自分の経験を振り返るノートを子供たちにつくってもらっています。

富良野・未来づくり会議という組織と学校と連携し、「ふらのみらいらぼ」という住民の団体も受け皿として創りました。「ふらのみらいらぼ」の活動から小中高をつなげていくのです。田舎の子供たちは外で遊ばなくなっています。そこで、自分が住んでいる地域にでかけて自然を体験させる機会をつくりました。ランタンをつくる体験では、ランタンが上に上がって降りてくるように計算をするのは理科の勉強にもなります。消火消防の観点で課題がたくさんあったのですが、大人たちがJRや警察に頭を下げました。こういったイベントが起点となって、来年から市の公式のイベントになるそうです。

キャリア教育の一環でウェディングプランナーをやりたい子供がいて、それならと、結婚式に必要な裏方の仕事をすべて子供たちやってもらい、半年間かけてやってみる事業も進んでいます。交流をしながら、仕事を体験。仲間と共に、自分を表現し合う事で新しい自分をつくりだし、仲間との間で新しい自分を発見する。このようにして、自分たちが町をつくってきたんだという体験をして育ち、高校にあがってもらおう。やがては、町をでることもあるのでしょうか、町の人たちはやがて帰ってきてほしいと願っています。そういう体験があるなら、きっと帰ってくると思います。観光では、もう食べていけないので、こういう形の住民のボトムアップで地域をつくっていく方向になっています。

みんなが同じ価値を共有し競争するのではなく、いろんな価値をもって互いにつながり、一緒に創っていくことを背景にしながら、子供たち、学校、企業、行政と連携して、科学実験の講座を行っています。やがてOBになった子も関わってくれます。

4 長野県飯田市にあるOIDE長姫高校は、地域人教育というのを4年に亘り行っています。地域公民館が問題をプレゼンし、生徒が解決にむけて、取材や課題解決のプログラムをつくっています。例えば買い物難民が多い地域に対して、生徒はリヤカーでモノを運ぶ事業を考えました。すごく売れるので喜んでいたのですが、売れすぎるので疑問に思ったところ、買い物難民というのは近隣との人間関係が切れてしまい、頼む機会、一緒に買う機会がないために起こった現象ということがわかったのです。高校生に来てほしいので買ってしまっていました。こうした「寂しい」といったことは、高齢者だけの問題ではなく、すべての年代の問題でもあります。そこで、行商だけではなく、交流の場を作ることに気がつきます。この人間関係をつくるのが、商業の基本なのではないだろうかという考えにいたります。

こういうことに気づくと、生徒たちの学校での生活態度も変わります。学校としては、大きな成果があるプログラムなので、どんどん実践が進んでいます。市が関わって、人材サイクルという形を考えています。高校までに市で良い体験をしていれば、大人になってからも帰ってくると考え、学校、地域あわせて子供たちを支えています。

高校生が地元のお年寄りからレシピをきいて、新しい食品を作ったり、空き家をシェアスペースにして、そこに不動産業界が関わって新たな産業が生まれています。水が豊かなので、市民ファンドをつくって、水力発電を作ったり、キッズニアの地域版を作ったりと、子供たちが主体的に動いていくことで、自分たちが地元で根付いていること、学んでいることがハッキリしてきました。1つの高校だけではなく、他の高校でも何かできないかという動きが出ていて、18歳の投票率100%を目指す動きができています。そうすると、高校生は学校から離れると集まる場所がないのがわかりました。そこで、役場と交渉してみると、高校生のシェアスペースが作られ、今度は小中高生が集まってきました。こういう小さなコミュニティがうまれてきています。信用と確かな安心が満たされたコミュニティです。自分たちと高齢者、高校生と地域の人々、こういった関係の中で社会を作っていきます。公と私という2つの括りではなく、自分たちが主体的に動いて、行政にはそれを支えてもらう形です。子供、若者、地域の人々が、つながり、つくり、暮らしていく。こういった形の方が実は行政としてはコストがかからず長期的にみると成長していきます。

公民館から、公民館的なものという形に広がっていくように思えます。公的に保証された場所だけが公民館ではなく、住民がどう使うかが居場所として大事だと思います。公民館には観客がひとりもない。傍観者はひとりもないのです。こうした動き、つまりは住民が全員主役というのが大事なんでしょう。ネットワークという形でつながりをつくるだけだと、つながりが切れてしまうと機能しなくなります。そこで、ひとりひとりのドットが広がるような形だと、壊れにくく、他の世代と繋がりも維持しやすいのではないかと思います。こういった新しい時代に対して、大人がどう関わられるのか問われています。大きな社会をなんとかするのではなく、小さな社会に関

わり、作り、育てていくのが、これからの形になっていくと思います。

学習支援者 谷原

すごく贅沢な時間を過ごさせていただきました。ありがとうございました。質問はありますか？

参加者2

杉並のような都市を研究対象にするとしたら、どのようなことを見たいですか？

ゲスト 東京大学大学院牧野教授

教育システムは、これから変わります。塾から、詰め込み教育ではなく、体験教育プログラムを導入できないかという相談をうけているのですが、これからは、同じ基準で子供たちを全部計れない時代になってきます。学校としては、午前は基礎授業で、午後は社会体験プログラムにするという考えがあります。本物の文化にふれる授業も都内では組めます。一方で、地域が子供たちを受け入れて職業体験をさせる離島があります。これが、職業体験だけではなく、人生設計まで見てくれるので、移住者が増えてきます。子供の頃から、地域や自然に関わり、地域を運営できるよ(生きていけるよ)と伝えて、大学に入学する子供も増えてきます。こんな時代に、都市ではどう大人が関わっていくのかは、大変重要です。どう応援するかです。今までは、塾や学校にいかせれば良かったのですが、これからはそうじゃなくなっていく可能性があるんで、そこに大人がどのように関わっていくのかを見たいです。また、大人自身が社会参加しながら、地域を豊かにしているかも見たいです。

2060年には今より人口が4000万人減ると試算がでています。それを防ぐために、出産を義務化するという意見もでるほどです。システムを残すため、国という立場から考えるから、このような意見がでるのでしょう。今から国単位で年間30万人増やすとなると大変ですけど、12,000人程度の自治体で、年間30人子供を増やす議論をしていく方が現実的だと思います。小さな社会を作り、お互いを面倒みられる社会を作っていく方が、安心して子供を産み、育ててくれるでしょう。

参加者6

地域に近づけない、入れない大人が多いと思います。自分で見つけて入っていくしかないのかなとも思う一方、ハードルが高くて、高齢者が地域に参加しにくいというのもあると思います。

ゲスト 東京大学大学院牧野教授

子供とロボット研究者をつなげる活動という動きがあります。高齢者と子供がつながる仕組みです。地域に入り込まなくても高齢者が、教えるという形で関わることは出来つつあります。

小さな社会というのは、地縁だけではなくて、自分が教えるフィールド、趣味の世界でも良いのです。そういった自分のこと、強み、関係性に気づくのが第一歩かもしれません。積極的に関わらなくても、関心を持ってくれるだけでも良いのです。サイレントマジョリティの参加と言います。こういう方がいるのが大事で、居場所を応援してくれたり、自分は参加しなくても良い評価をくれることがあります。

学習支援者 谷原

贅沢で質の高いお話を聞かせていただきました。ありがとうございました。大人塾の方向性のように、小さなコミュニティをたくさん作っていくのは正解のようですね。